

# 環境教育の視点からみた体験学習の支援方法に関する実証的研究

小川かほる

## 1 はじめに

環境教育の規範であるトビリシ宣言の環境教育の原則の一つに、「多様な学習環境を活用し、環境について、そして環境から学ぶさまざまな教育・学習手法を活用し、実践活動や直接体験を重視する。」とある。体験学習とは、“講義”のような知識伝達型の学習ではなく、学ぶ人本人の体験(実際に自分の身体と心と頭で経験する)によって学ぶことをいう。そして、体験を通して何を学んだのか、それを自分自身で確認するプロセス(体験学習の循環過程)があつて学んだといえる。

地域の環境問題解決に取り組んでいる環境保全活動団体の中で、その地域の自然を活用した体験型の環境学習を実施している団体がある。しかし、“単なる体験”で終わっている事例があるように思われる。“単なる体験”を“よい環境教育”として実施するためには、何に、どう取り組めばいいのだろうか。本研究は、千葉県で実施されている体験型環境教育活動・環境保全活動を、環境教育としてより効果的なものとするための支援方法を検討するために行った<sup>注1)</sup>。

## 2 実証研究

### (1) 川の汚れ浄化ゲームの開発・試行版製作・評価(2006・2007年度)

印旛沼流域水循環健全化緊急行動計画のみためし計画学び系の事業の出前講座として、印旛沼学習モデル校(成田市立公津小学校)において、参加体験型環境教育プログラム「誰が川を汚したの？」を実施した。このプログラムは川の浄化作用を無視した内容となっているために、「川は汚い」というイメージを持つ子どもがいたことがわかった<sup>1)</sup>。

そこで、川の浄化機構や汚れの原因を楽しく理解するためのゲームを2006年に開発し、2007年に学習効果を検証した結果、一定の学習効果が認められた<sup>2)</sup>。

### (2) 八千代オイコス「川の学校」支援(2007・2008年度)

NPO 法人八千代オイコスは、八千代市を流れる花輪

川の自然の回復を目指して、水草の植栽や護岸の清掃、草刈りを実施している。子どもたちが自然と触れ合うことが少なくなったことに問題意識をもち、子どもたちに、花輪川での体験的な学習を通して自然とのふれあいの面白さ、水の大切さ、豊かな自然環境の尊さを感じ、日頃の生活の中で自然を大切にすることの重要性を感じてもらうことを目的として「川の学校」を実施している。

2007年にその活動を観察法により評価し、その結果を共有した<sup>3)</sup>。2008年の「川の学校」では、評価結果に基づき改善されたプログラムが実施された。

### (3) 環境パートナーシップちば「ちば環境学習“水”ハンドブック～印旛沼・三番瀬～」編集発行支援(2008年度)

2008年度千葉県NPO及び事業者による環境学習地域教材作成事業の受託事業として、環境パートナーシップちば<sup>注2)</sup>が、県内の環境保全活動団体の活動分野や環境学習実施に関するアンケート調査を行い、印旛沼・三番瀬に関する環境学習プログラムを紹介する報告書を作成した。この事業に監修者として参加し、地域の環境保全活動団体にこそ実施できる環境教育があることを学び、「環境保全活動で環境教育を！」と提案した<sup>4)</sup>。

## 3 環境保全活動を通じた環境教育

### (1) 環境教育と体験学習の違い

環境教育は問題解決のための力を養い、行動できる人間の育成を目的としている。自然観察会で自然の中での気持ちよさを感じ、生き物の不思議さに目を見張り興味関心を持つだけでは、環境教育とはいえない。学びのプログラムは人の発達段階に応じる必要があり、特に幼少期には、豊かな感受性の育成が重要ではあるが、それだけでは不十分である。問題解決力を身につけ、持続可能な社会づくりのために行動できる人になるための学びが環境教育である。

### (2) 地域の環境保全活動団体の役割

地域から地球規模までの環境問題に気がつき、どうにかしなければと仲間といっしょに問題解決に動き始めた市民の人たちが、環境保全活動団体である。仲間と協力して問題解決に取り組みながら、学び続けている人であり、問題解決に取り組んでいるからこそ地域の環境教育の担い手となる資格があるといえる。

地域の課題が環境教育の教材であり、学習の場となる。問題解決のための環境保全活動そのものが環境教育となる。大人だけでなく子どもたちを活動そのものに巻き込むことが、環境教育の機会提供である。子どもから大人まで、ともに行動する仲間として、学びあう仲間として、地域での問題解決に取り組むことを通して、問題解決力を身につけることができる。

地域の課題・資源を活用した環境教育プログラムをつくる際に、以下の事項が必要である。

- ①地域の課題，地域の資源を把握する。
- ②誰を対象に，その人に何を学んで欲しいのかを明確にする。
- ③その目的を達成するために，誰が，何を，どこで，いつ，どのようにするのかを決める（実施計画）。
- ④目的達成の評価指標と評価方法を決める。
- ⑤評価（内部評価・外部評価）に基づき，環境教育プログラムを改善する意欲を持つ。

### （3）環境教育の“し掛け人”としての力

環境保全活動の中で環境教育に取り組むときには，次のような能力が必要である。

- ①活動の意義（問題，根本原因）を把握し，それを言葉や文章に表現できる。
- ②学ぶ人のことを第一に考えて（学ぶ人中心主義），最善をつくすことができる。
- ③学びあう仲間として，他者を受け入れる。
- ④知っていることを一方的に話すのではなく，学ぶ人の知識や経験に応じて伝え，よき体験を提供できる。

### （4）改善のための評価（内部評価・外部評価）

「目的は妥当か」，「目的を達成するための方法は妥当で適切に実施されているか」，「目的は達成されたか」，「他の方法はないか」，「どこを改善すればよいか」を判断するために複数の方法で実施する。

- ①観察法
- ②面接調査法

### ③アンケート法

## 4 支援に関する考察

“評価”という言葉に対して，嫌悪感を持つ被評価者がいる。改善のための評価の有効性を理解し，自分たちの活動に責任を持ち，よりよいものにしようという意欲とその能力を持つことが重要である。“評価”は，マネジメントサイクル（PDCA）に他ならず，“評価”を使いこなすための支援が必要であることがわかった。

また，市民の取組に環境教育および課題に係る専門家の参加があることがのぞましい。この場合，教える一教わるという関係ではなく，共に学びあう関係を構築することが重要である。市民が環境学習および環境保全活動の相談を気楽にできる窓口が必要である。

### 注

注1) 千葉県立中央博物館との共同研究であり，2006～2008年度の中央博物館重点研究「子どもの自然・文化体験に果たす博物館の役割」の分担研究として実施した。

注2) 市民団体，市民，行政，企業および専門家とのネットワークとパートナーシップによる活動の展開を図ることを目的する千葉県内の環境保全活動団体のネットワーク。

<http://kanpachiba.com/index.html>

### 引用文献

- 1) 小川かほる・石井誠治・今田陽子(2007) 環境教育の視点からみた体験学習の支援方法に関する実証的研究，千葉県立中央博物館重点研究レポート
- 2) 石井誠治，今田陽子，小川かほる，金井純治(2008) 楽しく学べる「川の汚れ浄化ゲーム」の開発とその学習効果の検証，用水と廃水，Vol. 50, No. 11, pp. 18-24
- 3) 小川かほる・庭野裕（2008）環境教育の視点からみた体験学習の支援方法に関する実証的研究Ⅱ-2—市民環境活動団体による体験型環境教育「川の学校」評価—，千葉県立中央博物館重点研究レポート
- 4) 環境パートナーシップちば(2009) ちば環境学習“水”ハンドブック～印旛沼・三番瀬，千葉県，p. 2-3（平成20年度NPO及び事業者による環境学習地域教材作成事業）